

商店街における銀座地名の伝播に関する研究

A Study on the Spread of the shopping streets named Ginza

05M43170 田代英久 指導教員 齋藤 潮
Hidehisa Tashiro, Adviser Ushio Saitou

ABSTRACT

There are more than 100 “shopping streets named Ginza” in Tokyo, now. It was after Great Kanto earthquake that the first of them founded. This paper aims at grasping “when”, “where”, and “how many” they were, and inferring “why” they spreaded.

According to situation in original Ginza and features of their location of each epoch, at first, the connection between original Ginza and them can be found, as time passed, the shopping streets named Ginza increased, and the relationship cannot be seen clearly.

当初「職と場所の関連性」によって名付けられた「産業地

1. はじめに

1-1. 背景・目的

現在、東京都 23 区内には、100 件を超える「〇〇銀座商店街」と呼ばれる商店街がある。「〇〇銀座商店街」は、関東大震災以前には存在しなかったが、震災をきっかけに戸越に発足して以降、現在に至るまで、結成時期や地域は異なるが、「〇〇銀座商店街」が都内各所で結成された。多くの商店街が「銀座」という地名を引用した背景に、「銀座」地名に対するどのような認識があったのだろうか。

引用元となっている、中央区銀座の「銀座」は産業地名である。本来、中央区銀座は江戸幕府が銀貨鋳造所を現在の銀座 2 丁目に置いたことから、江戸の銀座は誕生した。職と場所の関連性がある名付けられた地名であったが、本来の意味が希薄になっているのが現状である。今では商業地名としての認識が強いのではないかと。引用においても、「銀座」という職と場所に関連した特徴ではなくて、中央区銀座の状況を意識したのではないかと考えられる。そして、中央区銀座の状況を意識しているために、その状況認識に応じて、「銀座」地名への認識も変化していったと考えられる。

そこで本研究では、「銀座」地名に対する認識とその変化を理解するために、東京都 23 区内の「〇〇銀座商店街」について、以下の 2 点を明らかにすることを目的とする。
①震災以降の「〇〇銀座商店街」の結成時期、および位置（空間分布）・件数を把握し、時期ごとの特徴を明らかにする。
②①で明らかになった特徴に関して、引用元である中央区銀座の状況との関係をみることで、「〇〇銀座商店街」と名付けた理由を明らかにする。

1-2. 銀座商店街の定義

本研究で扱う地名は、鏡味が次のように定義する商業地名である。商業地名とは「商店街名として行政上の公称地名になっていない通称地名を主としてそれが正式の町名や街路名になったもの、(略)」⁽¹⁾である。中央区の銀座が

名」だったことに対して、本研究で着目している銀座商店街は場所と関係のない「商業地名」に当たる。

なお本研究では便宜上、中央区の銀座を「中央区銀座」と呼び、〇〇銀座商店街を「銀座商店街」と呼ぶ。また、商店街結成当初から銀座商店街と名乗っていた場合は「当初から銀座商店街」、商店街を結成時には違う名前だったが、途中から銀座商店街に変更した場合は「途中から銀座商店街」、商店街名から銀座をとった商店街を「銀座を捨てた商店街」、震災後から戦災前までに結成した銀座商店街を「老舗銀座商店街」と呼ぶ。

1-3. 研究の位置付け

銀座地名を対象とした既往研究として、鏡味⁽²⁾は全国商業地名に影響を与えた「銀座」の模倣地名の分布を明らかにしている。また、佐藤⁽³⁾は、地方の 16 の地方銀座商店街について、場所と設立時期を区分し、銀座商店街が普及した要因として、戦災復興の影響を指摘している。

地名に関する研究として、仲間⁽⁴⁾はビルやアパートなどの不動産の名称と地理的特徴を関連付け、地区のイメージ分布、伝播の要因を明らかにしている。

本研究は、銀座商店街の分布に着目している点では鏡見や佐藤の研究に類似するが、地名の伝播の要因に関心を持つという点で鏡味と異なる。この点では佐藤と近いが、中央区銀座と銀座商店街の伝播の関係を明らかにしている点で異なる。伝播の要因に着目する点では仲間に近いが、商業地名という土地と固有の関係を持たない地名を扱うところに、本研究の独自性があると言える。

1-4. 研究の方法および構成

1 章では、調査概要を述べる。2 章では、基本データとなる「〇〇銀座商店街」の結成時期、および位置（空間分布）・件数を大まかに把握する。3 章では、中央区史や先行研究などを用いて、中央区銀座の変遷を把握する。4 章では、東京都 23 区における銀座商店街の分布の特徴および銀座商店街の結成時期を整理し、時期ごとに把握する。

5章では、3章と4章を受けて、各時期について、銀座商店街の伝播の背景を各時期で考察する。6章では、結論を述べる。

1-5. 銀座商店街の選定と調査概要

本研究を始めるに当たって、①銀座商店街の場所をリストアップする②銀座商店街の結成時期と命名理由を把握する。以下に述べる方法で調査した。

①について、昭和8・10・14年の東京市商工名鑑、1960・1967・1977・1978・1982・1984・1986年版の東京都商店街名簿、昭和50・55・平成4・7・13・16版全国商店街名鑑と各区の商店街分布図より、商店街の位置を把握した。

②について、予備調査では、平成16年版全国商店街名鑑の中で、銀座商店街に、電話をかけ「銀座商店街の結成時期と名付けた理由」を伺った。予備調査において、おおよそその調査結果は得られたが、回答者が電話応対者に限られるため、回答内容にばらつきがあり、十分な情報が得られないという問題があった。そこで、本調査では、各銀座商店街で複数の店に訪問し、商店街に銀座と名づけた時代に詳しい人を探した。面接調査法もしくは、留置調査法と郵送調査法を併用した。文献によるデータも併用した。152件の銀座商店街中、102件の銀座商店街は有効データとして採用した。(全152件のデータを図9に示す。)

2. 銀座商店街の成立と分布

2-1. データの取り扱い方

本研究ではデータを扱う上で、3つの点に留意する。①振興組合や協同組合以外の商店街も扱っていくので商店街や商店会などは区別せずに扱う。②商店街に銀座と付けた時期を見ていく研究なので、現在合併して出来た商店街が合併する前に商店街名に銀座が付いていた場合は一つとして扱う。元で呼ばれている通称名称を追っていくことは困難であるので、通称名称ではなく、正式名称を扱う。

2-2. 時代区分

「当初から銀座商店街」と「途中から銀座商店街」が商店街名に銀座を付けた時期と、商店街名から銀座をとった時期をグラフにまとめた(図1)。初めて銀座商店街が出来た関東大震災後と、戦後の昭和20年から昭和32年にかけて、「当初から銀座商店街」の数は昭和25年がピークを迎え減少する時期、昭和30年以降、「途中から銀座商店街」の数が増加していく一方で、商店街名に銀座を取り始めた時期がある。3章以降、これら震災後、戦災後、昭和30年以降の3つの時期を「第1期」、「第2期」、「第3期」とし、各時期に考察していく。

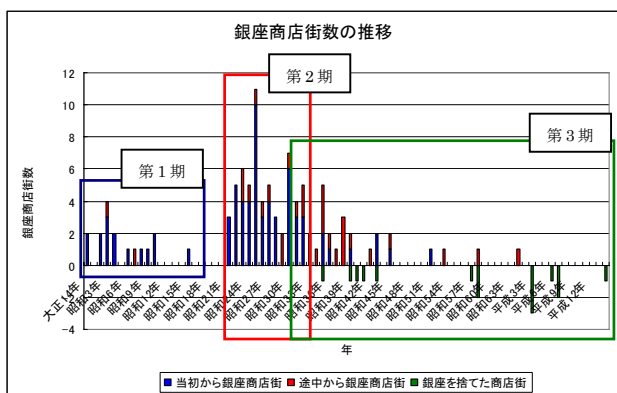


図1 銀座商店街の推移グラフ

3. 中央区銀座の変遷と位置付け

3-1. 明治時代から関東大震災までの中央区銀座

中央区銀座は江戸幕府が銀貨製造所を置いたことから

始まった。当時は通称名に過ぎず、寂れた、汚い職人町であった。銀座が正式に町名になったのは、明治5年のことである。

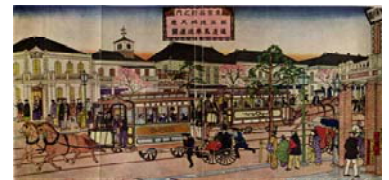


図2 銀座煉瓦造鉄道馬車住

明治2年の銀座の大

火をきっかけに、明治政府は銀座に西洋風の煉瓦街を建設した。歩道の整備や松や柳などを植栽し、ガス灯の設置により、夜を昼に変えたと賞賛されたものの、当初は、なかなか人々に受け入れられなかった。藤森は「明治の東京計画」の中で、「明治20年頃から、日本橋をしのいで東京を代表する商店街に成長した」⁽⁵⁾と言っている。

後に山の手銀座と言われる新宿は、ほとんどが野原で、繁華街と言える状態ではなかった。

3-2. 第1期(関東大震災以後の中央区銀座)

明治20年過ぎ、銀座は日本橋商店街に代わって中心商店街となった。三越百貨店(越後屋)は日本橋から銀座に進出した。日本橋に次ぐ繁華な商店街だった、上野広小路に本店おいた松坂屋も、銀座に支店を出した。松屋は神田の今川橋にあったが、関東大震災後に銀座に本店を移した。百貨店がなかった銀座に3つのデパートが進出したのは、東京の中心的な商店街として有望と考えられていたからだろう。また、カフェ街のめざましい復興により、旧銀座の歓楽的気分を取り戻し、東京歓楽街として王座を占めたからだろう。大正10年に伐採された柳は、懐かしむ人々の期待に応え、昭和7年に再び植栽された。銀ぶらが 대중化されたのもこの時期である。



図3 昭和初期の銀座通り

山の手銀座と言われた新宿は、繁華な商店街へと急速に発展していたが、まだ新しい都市で、電車のターミナルとしてのイメージが強かったという。一方、明治時代まで日本一の盛り場とだった「浅草は保守的で時代遅れ」⁽⁶⁾と言われていた。他の都市も銀座の華やかさに敵わなかったと言えよう。

3-3. 第2期(戦後の中央区銀座)

連合軍占領軍が銀座に進駐したのは、昭和20年9月8日のことである。銀座は占領行政の中心になった。占領軍の進駐に伴い、各種の施設が相次いで接収されていた。昭和20年代は百貨店が地位を固めた時期でとされるが、銀座には商店が十軒しかなかった。新宿・渋谷なども同じように露店商が集まり、闇市が開かれていたが、閉鎖に追い込まれた。



図4 占領時代の銀座交差点付

昭和24年になると、銀座の商店数は、一部商業などを含むが、144店となり、浅草の284、池袋の184に及ばないが、渋谷の83、新宿本通りの83、人形町の77より多く、立ち直りの様相を強めていく。しかし、戦前の銀座商店街に比べて、専門性は薄れ、商店街としての個性は薄れている

ったという⁽⁷⁾。一方で、「昭和20年から30年代は(略)東京といえば、銀座であり、新宿や渋谷は出てこない。当時は東京の繁華街の中で銀座だけが特別であった。」⁽⁸⁾とある。戦後は中央区銀座を含めて、他の都市も闇市があり、似たり寄ったりの状態であった中で、中央区銀座は別格であったものと考えられる。

3-4. 第3期(昭和30年代以降の中央区銀座)

昭和27年頃から、高さ39mの服部の時計塔や52mの松坂屋の展望台といった、30m級のビルの建設が始まった。昭和29年から32年にかけて、「ビル・ラッシュ」と言われる時代を迎えていた。銀座には、高級店や専門店が並んだ。広告や宣伝も激しく、広告塔であるネオンサイン塔が、夜の銀座で人の目を楽しませた。中央区銀座だけでなく、百貨店がある新宿、池袋、渋谷などでも後背地の開発に伴い、各々が繁華街として発展していった。中央区銀座だけが繁華街であるという図式が少しずつ変化していった時代と考えられる。



図5 松坂屋より銀座1~5丁目方面

4. 銀座商店街の伝播の考察

4-1. 第1期の銀座商店街

大正12年9月1日に関東大震災が発生し、東京は壊滅状態に陥った。被害を受けた場所を図6の黒色の部分である。この直後から、戸越銀座、小山銀座といった銀座商店街が出現し始めた。これらの銀座商店街は関東大震災で被害を受けた地域のすぐ外側にあたる。また、昭和初期の銀座商店街は現在の北区、荒川区、江東区、品川区、大田区の一部にも分布しており、大正期にできた2つの銀座商店街よりも被災地域から離れた地域に広がっている。

また、大正時代にできた戸越銀座、小山銀座と昭和初期の銀座商店街との関係からみると、大正期の銀座に隣接した商店街が2件あることがわかる。なお、第1期には銀座商店街数は16件である。

4-2. 第2期の銀座商店街

昭和20年8月15日に第二次世界大戦は終わりを遂げた。黒く塗られた部分は被災地域である。実際に被災地域でこの時期に結成した銀座商店街は、全体の半分であるが、被災地域に隣接している商店街が多い。また、老舗銀座に隣接している商店街、第1期には見られなかった荒川の東側にも分布している商店街がある。北区・荒川区では、日暮

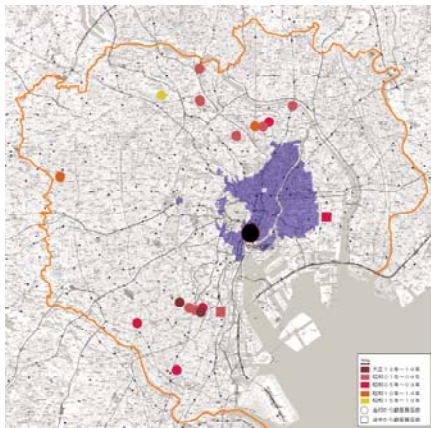


図6 震災の被災地と震災後の銀座商店街の分布図

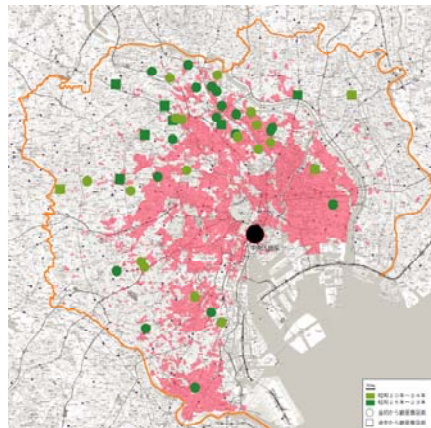


図7 戦災の被災地と戦災後の銀座商店街の分布図

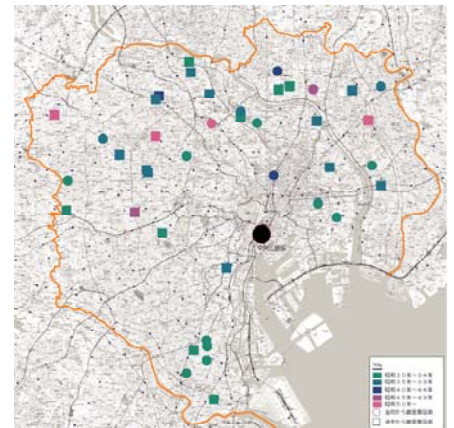


図8 昭和30年代以降の銀座商店街の分布図

里一北赤羽間の京浜東北線沿線に多く分布しているのが特徴的である。(図7)

第2期には、銀座商店街は44件が結成した。①老舗銀座商店街に隣接している商店街(12件)、②電車沿線で結成した商店街(26件)、③荒川の東側で結成した商店街(2件)などの分布の特徴があることがわかった。

4-3. 第3期の銀座商店街

昭和31年の経済白書において、「もはや戦後ではない」と言われた時期であった。第3期の特徴として、中央区銀座からもっとも離れた場所(東大泉仲町銀座)と近い場所(魚らん銀座)に結成していることから、伝播の範囲が広がっていることがわかった。さらに、荒川の東側の足立区、葛飾区、江戸川区でも多く結成されている。また、大田区、中野区に銀座商店街が多く伝播していることもわかった。昭和30年代では、第1、2期では見られなかった旧15区内に3件の銀座商店街(上野銀座、魚らん銀座、住吉銀座)が結成しているのも特徴である。(図8)

以上のように、第3期には、銀座商店街は41件が結成した。①老舗銀座商店街に隣接して結成した商店街(5件)、②電車沿線で結成した商店街(22件)、③荒川の東側で結成した商店街(9件)、④旧15区の内側に結成した商店街(3件)、などの特徴があることがわかった。

5. 銀座商店街の成立の背景に関する考察

5-1. 第1期の中央区銀座と銀座商店街の関係

関東大震災後、被災地の外側に、銀座商店街が3件発足している。第1期以前の中央区銀座は日本橋や浅草をしのいで、第一位の繁華街であった。銀座商店街は震災からの復興を震災前の中央区銀座に重ねたのではないかと、また、戸越銀座の場合、銀座でリアカーに載せた商品を買って、帰りにリアカーに撤去することになった煉瓦を積んで、戸越に持ち帰り、道路の舗装に使ったという話をヒアリング調査結果によって得た。直接、中央区銀座と縁があった銀座商店街である。

昭和初期において、西条八十みよる「当世銀座節」、「銀座セレナーデ」、「銀座の柳」などの銀座舞台にした流行歌が世にでている。また、ラジオなどの情報媒体の急速な普及に伴い、中央区銀座の「銀座」のイメージが大衆化された。この時期には銀座商店街が14件結成されている。震災前の中央区銀座ではなく、震災後の中央区銀座の華やかさを指向していたのではないだろうか。加えて、昭和に入ってから、戸越銀座に隣接して3件、老舗銀座の周辺で多く結成されている。例えば、百反銀座は戸越銀座の北に位置し、戸越銀座の街並に似ていたから商店街名に銀座地名を付けたというヒアリング調査結果によって得た。このことから、「銀座」現象が生まれた中央区銀座の繁栄への憧憬だけでなく、より近隣で実現した老舗銀座での震災からの復興・繁栄を目標とするような感覚があり、双方の

影響を受けて、名付けに至った可能性がある。

5-2. 第2期の中央区銀座と銀座商店街の関係

戦争で被害を受けた地域やその付近で銀座商店街が第2期に、半分以上が結成している。商店街自身の復興に中央区銀座の戦災復興を照らし合わせた可能性がある。

昭和20年から24年にかけて、中央区銀座で闇市が開かれなど、震災後の社会と似ていたと言われている。すなわち、中央区銀座はこの時期、憧憬の対象とはなりにくかったのではないかと。一方で、銀座商店街は21件増えている。昭和24年に結成した荻窪銀座の場合、明治初期から昭和初期にかけて、中央区銀座のイメージの代表であった柳を商店街に植栽したという話をヒアリング調査結果によって得られていることから、昭和初期の中央区銀座の繁栄を回顧し、名付けに至った可能性がある。

昭和25年から29年にかけて、銀座商店街は29件増えている。GHQに接収されていたビルなど解除され、百貨店の地位が確立していくのは中央区銀座に限ったことではなかった。それでも、川本氏は「昭和20年から30年代は(略)当時は東京の繁華街の中で銀座だけが特別であった。」と評価している。また、昭和20、30年代は中央区銀座を舞台とした映画が多く世に出ていた時期であった。第2期において、中央区銀座は特別な位置付けであったことが考えられることから、戦災からの復興・繁栄の目標とするような感覚があった可能性がある。

また、昭和23年以降「途中から銀座商店街」が増え始めている。昭和20年代だけでも8件ある。わざわざ「銀座」地名に変える行為が見られる上、駅前に銀座商店街が26件結成されている。特に都電荒川線沿いに9件結成されている。第2期では、商店街名に銀座と名づける行為が大衆化する始まりの時期だったのではないかと。

昭和初期の中央区銀座の繁栄や戦後の中央区銀座の復興など、中央区銀座を目指す意識に加え、商店街名に銀座と名づける行為が大衆化するなど、銀座という地名に様々な認識があった時期と考えられる。

5-3. 第3期の中央区銀座と銀座商店街の関係

昭和30年以降から商店街名から銀座を外す商店街が18件ある。昭和30年代に入ると、中央区銀座だけでなく、他の都市でも復興が進んでいく。新宿、渋谷などが副都心になり、繁華街が分散していく時代だとも言える。繁華街＝中央区銀座という図式に変化が見られ始めた時期であり、銀座が特別な意味を持たなくなったものと考えられる。

一方で、昭和30年から39年にかけて33件、昭和40年以降に8件の銀座商店街が増えている。この時期、中央区銀座は戦災復興が終えた時期であり、復興としての感覚で名付けた可能性は低い。今までに見られなかった地域や中央区銀座に最も近い場所(魚らん銀座)と遠い場所(東大泉仲町銀座)に結成され、第2期以前より、銀座地名の範囲が広がったことがわかる。中央区銀座や近隣の銀座商店街の動向よりも、「銀座商店街」という呼び名そのものが一般名詞化したと考えられる。

5-4. 中央区銀座と銀座商店街の関係のまとめ

各時代の銀座商店街の分布や中央区銀座の変遷を見た結果、中央区銀座と銀座商店街の関係に変化が起き、関係が希薄化していると考えられる。

6. 結論

本研究では、銀座商店街の位置や結成時期を明らかにし、各時代の「中央区銀座の変遷」と「銀座商店街の分布と件数」を通じて、中央区銀座と戸越の濃密な関係から、銀座商店街の一般名詞化に至るまでの認識の変化の可能性を

示唆した。

7. 今後の課題

①本研究では、銀座地名の認識に注目し、銀座商店街のみ取り扱った。このため商店街に銀座と名付けることにより、近隣の商店街にどのような影響があったのか、という点には言及することができなかった。今後、時代ごとの近隣の商店街も把握し、商店街に銀座地名を付けたことが、地域にどのような影響を与えたのかを明らかにしたい。

②5章において、中央区銀座で店を構えていた人々が、震災や戦災などの移転で、郊外に店を構えた際に、中央区銀座を回顧するような気持ちで商店街に銀座と付けた可能性を示した。本研究では、銀座通りの店の変遷が把握できる資料から、銀座通りに店を構えた人にしか着目できなかったが、今後は銀座通りに限らず、銀座地区全般での商店街の変遷を見ていくことで精度が上げていく必要がある。

参考文献

- (1)商業地名の変化の型の考察：鏡味明克：愛知学院大学文学部、第31号 2002年
- (2)「銀座」と地方名称との接触を中心とする商業地名の研究:鏡味明克：三重大学教育学部研究紀要、人文・社会科学、第44巻、1993年
- (3)「地方銀座」の設立に関する基礎研究：佐藤ら、日本建築学会学術講演梗概集(九州)、1998年
- (4)地名呼称の分布に見る地区イメージの伝搬に関する研究：仲間浩一、都市計画論文集、第29巻 pp607-612 1994年
- (5)明治の東京計画 藤森照信 岩波書店 p35 1982年
- (6)新版大東京案内 今和次郎 中央公論社 p114 昭和4年
- (7)銀座商店街の歴史的考察 中村孝士 東京経大会誌 p50 1983年
- (8)銀座の街並展一世紀をこえる銀座の活カ-：「銀座の街並展」実行委員会、「銀座の街並展」実行委員会、2000年

補注

- 図2：中央区史(下) (日比谷図書館所蔵)
- 図3：中央区史(中) p170
- 図4：中央区史(下) p1140 (都政史料館提供資料)
- 図5：中央区史(中) pp258-259
- 図6~9：2004年9月発行のゼンリン電子地図帳Z7を元に作成

